G 3009

一つの生き方　人間・飛鳥田一雄を語る

目次

ひとつの人格　安田金三郎　4

座談会
友人の語る飛鳥田一雄　29

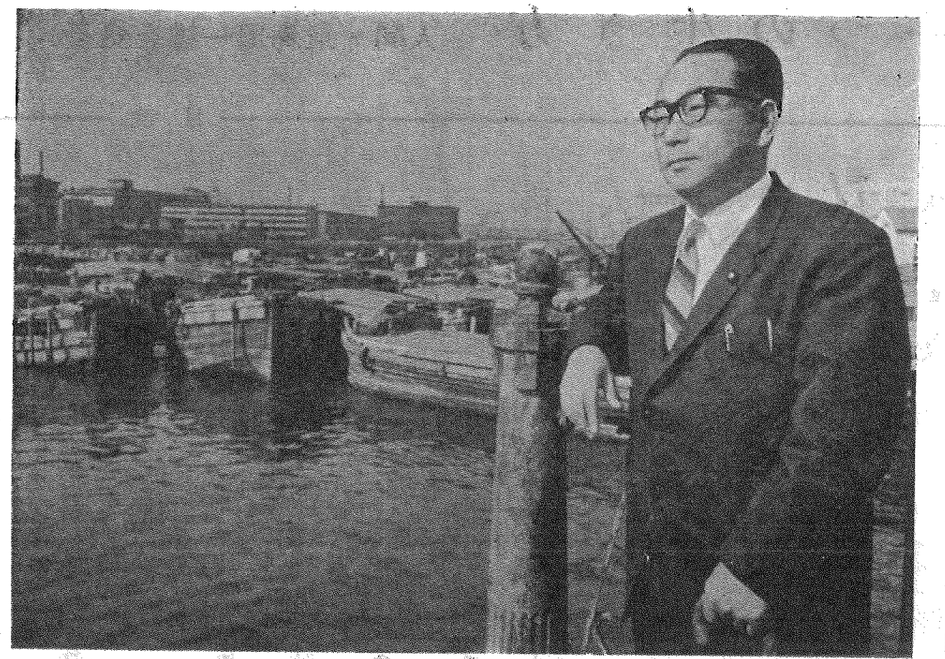
出席者　富井武寛
福原正義
松信総次郎
大館晃
城所達夫
司会　加藤衛

横浜市図書館

ひとつの人格

飛鳥田一雄

安田金三郎



敬愛で結ばれる父と子

世の息子たちは、自分一人でえらくなったと錯覚している。だが、えらいのは、たっぷりスネをかじらせてくれた親の方である。故諺に「親の光は七光り」とある。特殊な例外は除いて、誰でも「三光り」ぐらいの恩顧は受けているものだ。民主主義だとて、親を敬う方がいいに決まっている。

また、弟子と師との関係を説いた「青出于藍而于藍」―「出藍のほまれ」という言葉もある。これは親子の間柄にも還元できよう。息子は親爺を越えて成長したいものだが、飛鳥田一雄（いちお）夫人の幸子は、夫に向って「あなたほどお父さんを尊敬している人は珍しい」という。それにしても、この親子は美わしい敬愛で結ばれている。

ある紳士録によると、飛鳥田一雄の隣りに「飛鳥田喜一」なる人物が記載されている。履歴を見ると、こうである。

「明治二十三年十一月八日、神奈川県愛甲郡依知村（注・現在は厚木市）に生まる。大正五年明大商科中退。弁護士を開業。横浜市会議長、横浜弁護士会長、名古屋高検検事長を経て関東船員地方労委会長、全国人権擁護委員会連合会副会長、船員中央労働委員会々長」

すでに慧眼な読者は、一雄と喜一の関係を了解されたであろう。こんど取材のために会った人は、皆口を揃えて父の喜一をほめる。苦学力行の士、清廉謹直・謙虚な人、等々、こうも評価が一致する人物は珍しい。

野村正男の『法窓風雲録』（朝日新聞社）は明治・大正昭和三代の風雲のなかに生きた司法界の長老たちの談話を集めている。この本の喜一の話をまじえて、その横顔をのぞくのが、本題に入る前の順序でもあろう。

厚木には、飛鳥井とか、飛鳥田とか雅びた苗字が多いという。鎌倉時代、日蓮上人をあずかった佐渡の城主の居城（参勤交代用）があったところで、京都の公卿の娘、貴船の方を嫁に迎えた。この貴

一つの生き方　人間・飛鳥田一雄を

K289
1
714

館内
横浜市立図書館
0002930773

友　飛　会

館内
K289
1
714

船の方のお伴たちが都をしのんで名をつけたらしい。

喜一の父はハイカラな人だったし、醸造業をはじめたが、見事に失敗する。喜一の明大中退はこんな悲運にもよかろうか。横浜へ出て貿易商に勤めながら、勉強をおしまなかった。妻のさとは長い間小学校の教員をしたが、若い二人の苦闘時代である。喜一が大正十二年十二月、弁護士試験に合格するまでに、足かけ八年の歳月が流れている。苦学力行の士といわれる所以である。

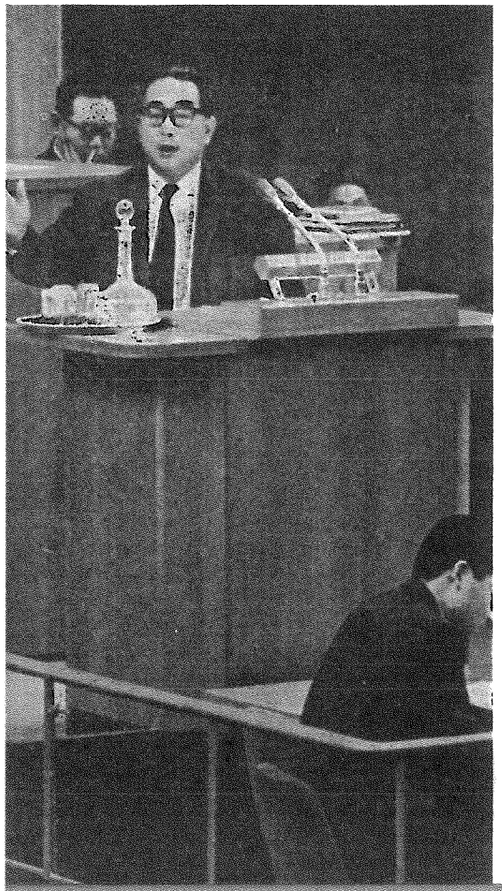
弁護士のかたわら、昭和九年には横浜市会議員に当選し、十七年には市会議長になる。古い民政党員だ。政治家としては清廉すぎたようだが、人柄を買われた。息子は「白樺派だ」というが……

喜一の地道な真価は、戦後二十一年四月、横浜弁護士会長になってからも発揮された。戦後の横浜は「基地の街」であった。勝者は負者を一段と見下したことであろう。そして、「文明」の名によって裁いたのである。知られているように、東条英機以不二十八人のA級戦犯「極東国際軍事裁判」は、二十一年五月三日からはじまるがBC級の戦犯裁判は、すでに二十年十二月十七日から、横浜の米軍第八軍軍法委員会によって開始された。

A級戦犯と違って、BC級の被告は満足に弁護士も頼めない。喜一は、運命のいたずらに泣く被告たちのために、横浜弁護士会を率いて、義侠的な奉仕に立ち上った。渡辺治湟や息子の一雄が直接弁護に当ったが、虐待事件で死者が出ている場合は、ほとんど極刑だった。みじめな被告や家族のことが、一生忘れられない想い出として残る。

その間、「法制審議会委員」もつとめた。こんな因縁もあって、昭和二十四年五月、高松高検検事長に転出する。いわゆる〃法曹一元化〃の掛け声によって、在野の弁護士で判事、検事になった人が多いが、喜一もその一人である。二十六年三月、広島高検検事長、二十七年十二月、名古屋高検検事長となり、二十八年十一月に定年退官している。

はじめは、「弁護士が横合いから飛び出しては、検事の士気に影



響する」と辞退したが、懇望はもだし難かった。息子の一雄がすでに弁護士となっていたので、息子に任せる安心感もあったのであろう。一雄の方も、父が退官まで安心して働けるように法律事務所を守ることが、父に対する義務だと思った。美わしいバトン・タッチであるが、このリレーは後年、逆になる。

一雄が昭和二十八年に代議士になり、とくに三十八年四月に横浜市長になってからは、今度は、息子のために法律事務所を守って、親爺が奮闘するのである。すでに喜一は七十六才だが、平和憲法論議をしては、若い者を負かすほどの若々しい情熱をもっている。

一雄は、「親の七光りで、ただブラブラやって来ただけ」という。外交辞令であろうが、心から父親を徳としているようである。どちらがえらいか、と野暮なことは言うまい。ただ「人間性の尊重」をねがう父母の下で、一雄が明るくのびのびと育ったことだけはたしかである。

■ 代走つきのバッター

まず、見出しの説明からはじめねばなるまい。野球ではヒットやフォアボールで塁に出ると、足の早い走者が代ることができる。だがこれはちがう。バッターボックスの傍に代走がいて、バッターが打つと、代りに一塁へ駈け出すのだ。もちろん草野球の話だが、そうざらにあるケースではない。日本でも稀有の「代走つきのバッター」は、若き日の飛鳥田一雄の演じた雄姿である。

大正四年四月二日に、横浜市磯子で生まれたが、五才の時に小児マヒにかかり、現在までも片足が不自由である。こんな身体の疾患から、じめじめした内向型の人間を想像し勝ちだが、反対である。明るく、積極的で、野球や水泳やテニスを大いにやった。さきの野球の話も、足の悪い一雄のために級友が特例を認めたというわけだ。守備の方はあまり動かなくともよいので、万年一塁手。校庭の名物男、人気者だった。

水泳といえば、小学校五年の時に遠泳会があった。磯子は現在では、杉田へ行く市電通りの海側は埋立てられているが、昔は近くまで海だった。

漁師のせがれも級友には多かったが、この遠泳会で足の悪い一雄が見事一等で泳ぎ切ったのである。それも犬かきかなにかで……。

五体満足の級友に対して、負けず嫌いのシンの強いところがあった。たとえば、階段を登るのに、友人が手を借そうとすると、断ったという。だが、この負けず嫌いには、構えた格好はなかった。

いま、二つのエピソードを伝えたが、磯子小学校五年から神奈川県立横浜第一中学校（現、希望ケ丘高校）へ入った秀才であることも、つけ加えておこう。六年をやらずに尋常小学校卒業と同資格を得なければならない。頭の切れる少年だった。

積極的な明るさ、負けず嫌い、頭の切れる秀才……こう並べてみると、今日の飛鳥田一雄のヒナ型は、すでにそろっているが、愛称「アッちゃん」は、また相当の茶目でもあったようだ。母のさとは長らく一雄のいた磯子小学校の教師をしていた。よくイタズラをして教員室に立たされていると、入ってきた母は顔をそむけて、その日は口もきかなかったという。

母のさとは三十年近く教員をしたが、昭和十七年、夫の喜一が横浜市会議長になる時までつづいた。教育への使命感をもち、しっかりした人だった。父母とも勤めに出る家庭では、当然開放的になろうが、母の両親が同居していた。祖母は旗本の娘で、気っぷの良いおばあさん。一雄は、〃おばあさん子〃であった。思わぬ疾患はマイナス面に働かず、素直で明るく、少し意地っぱりの少年が育ったといえる。

横浜は一種の植民地（？）だし、開放的な街である。新しく開港したこの街に、全国からフロンティア・スピリットの横溢した人たちが集ってきた。大体において、開放的な人間が多いようである。

昭和二年四月、磯子小学校の旧友川合武（現、消防庁次長）とともに入った、通称〃神中〃こと神奈川県立横浜一中は、いかにも港町にふさわしく、自由なスクール・カラーにあふれていた。同級生には現在各方面で活躍している俊才が多かった。

川合をはじめ、富井武寛（慈恵医大理事、教授）松信総次郎（有隣堂会長）、阪田隆（東大医学部助教授）、岡田任雄（朝日新聞東京本社政治部長）、加藤衛（横浜市大助教授、横浜演劇研究所長）寺田透（東大教授、仏文学者）らがいた。

このうち、川合から岡田までの五人は、一雄と共に『文芸春秋』四十年一月号の「同級生交歓」に顔を出している。同誌によると

「横浜一中―称して神中（今の希望ケ丘高校）の昭和七年卒業組である。三十年経ったいまでも、アッチャン、アッチャンの愛称が自然と口に出る。港町という土地柄からか、校風は自由放任主義だったが、進級試験は厳しく、一緒に入学した者も卒業の時には三分の二ぐらいに減っていた。同級生の大部分が青雲の志を抱いて開港場に馳せ参じた人の二世だったせいか皆きっぷがよかった」（川合・阪田記）

級友のうち、最後に記した寺田透だが、一雄夫人の幸子は寺田の妹である。とくに加藤とともに、中学上級ごろから親しかった。一雄の書いた「交遊抄」（日本経済新聞、昭和三十九年十一月十五日）によると、こうある。

「わたしたちの中学は横浜をいろどっている丘の中腹にあった。始業の鐘に遅れまいとして久保山から下って来るもの、電車道から藤棚の坂を駆け上がって来るもの、みんな桜並木のところで合流する。どれもこれも忘れられない連中だが、加藤衛もそのひとりだ。

四年生のころ、彼とわたしとはそろって人生への懐疑にとりつかれた。知識は色あせ、人の愛情は疑わしい。そんな二人は、よく野毛山を越して伊勢佐木町通りへエスケープしたものだ。疑わしいくせに雑踏が恋しいのだ。いや、彼はその雑踏の中でフト、行きずりの恋をさえ味わったはずだ」

この後に寺田や松信の話が続くが、それは後に紹介するとして、一雄と加藤は五年生になると、成績がガタ落ちになり、ドン尻り近くに低迷する。人生への懐疑にとりつかれたためだが、一雄は左翼思想にめざめ、マルクス主義文献をむさぼり読みはじめるのである。

■ 人生は所詮ひとりポッチ

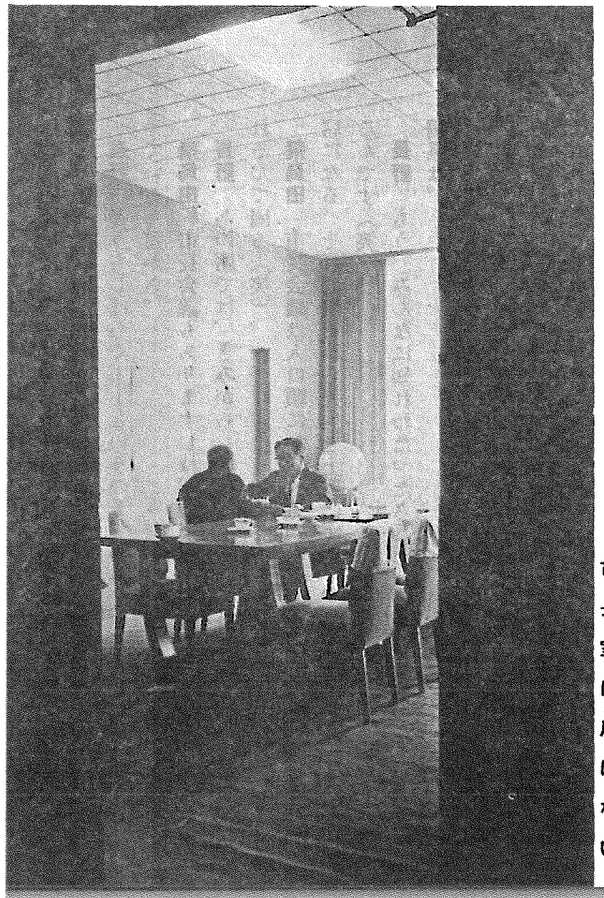
人生への懐疑にとりつかれ、中学五年になると、成績がどすんと落ちる。そして、お定まりのマルクス・ボーイの道を歩むが、それなりの深刻な理由があったのだ。

中学四年修了で旧制の高等学校の受験資格が得られる。神奈川県でも一流の名門校である。一雄も級友の川合武とともに、旧制の水戸高校を受験した。だが、「軍事教練をやれない体、それだけの理由で、入試の成績がよかったにもかかわらず、官立の高校から締出された」（『朝日ジャーナル』三十七年三月四日号「素顔」）。その年に満州事変がぼっ発し、すでに軍事教練を強化する圧力が学校に加わっていた。

一雄にとっては、ショックだったにちがいない、その直後である。憂愁に閉ざされた少年はフィと家を出たままいなくなった。父母や友人の騒ぎをよそに、二日ほどしてまいもどって来たという。たしかに「知識は色あせ、人の愛情は疑わしい」。多感な少年は、〝厚い壁〟を感じ、絶望に捉われる。

こんな一雄の煩悶を、とくに心配したのは、恩師の長野正義だった。神中は自由放任主義だったが、進級試験は厳しかった。ドン尻りに低迷する一雄。落第生が多く出るなかに、長野先生の配慮は一方ではなかった。この師弟の親交はそれから今日まで長くつづいている。この長野正義だが、現在は同じ神奈川県の横須賀市長である。

いま手許にある『朝日ジャーナル』四十年三月二十一日号の「先



市長室に扉はない

進後進」欄には、共に〃革新市長〃である師弟が、膝をまじえて歓談している。引用が長いが、二人の対話を見てもらおう。

長野　どうもしばらく――というのも、おかしいね。しじゅう会っているんだから。

飛鳥田　市長会議もありますしね、神奈川県下の。

長野　あの席では、きみから「先生、こちらへ」とひっぱりだされるんで困る（笑）。

飛鳥田　市長会議は人口順にならべるから、どうしてもぼくが上席になる。それは困るから先生を上席にすえて、横で悠々と飲んでるんです（笑）。

長野　もう、みんなに知れわたったらしいね、神中時代の二人の関係は。

飛鳥田　あのころの先生は、ういういしかったですね。いまはちがうけど（笑）。先生を無理に市長選にひっぱりだしたのは、ぼくが代議士のときですが、市長の仕事は忙しすぎる。へたすると便所に入っていても声をかけられるんだから（笑）。ういういしくなくなるのは、しかたがないかもしれない。

長野　中学時代はわたしが先生でも、政治生活では、君が先輩だ。

飛鳥田　市長は先生のほうが早いですよ。だけど、師弟だと、とくすることもありますね。正面きって持ちだせば、こじれかけない両市のあいだの問題でも、「先生、お願いします」で話がつく場合もある……。

ざっと、こんなフンイ気だが、長野は同じハマッ子で、神中の先輩でもある。三十二年から〃基地の街〃横須賀の市長をつとめる。

さて、一雄には、群衆の中の孤独を愛する「近代の憂鬱」もあった、というと信じてもらえないかもしれないが、本当の話である。若い時から文学書に親しみ、新しい感覚の俳句を作っていた。夭折した叔父の飛鳥田孋無公は、臼田亜浪の門で、清新な抒情句を発表した俳人だった。叔父の影響もあろう。「人ごみに誰か笑える秋の風」という叔父の句をよく口ずさむ。

こんな多感な少年が、父の書棚にクロポトキンを見出した時、失意の中に、新たな開眼を促されたことだろう。バクーニンの『神と国家』など無政府主義的な著書に親しみ、やがて、ブハーリンの『史的唯物論』が、マルクス主義への衝撃となった。中学五年の時である。当時は弾圧に次ぐ弾圧で、運動は退潮に向っていたが訴求力は絶大だった。

中学最上級の一年間は、挫折による失意と、新思想による昂揚との間を、たえず振幅したことであろう。勉強がおろそかになったとて、トガめるわけにはゆくまい。人生の孤独を感じる年ごろでもある。そんな時代をこう語る。

「……加藤、寺田、私のグループは、この山（野毛山）を格好の散歩道とした。そして、思い思いの想念を頭にいっぱいにしながら港を見おろしたことであった。

そんなあるとき、『人生は所詮ひとりポッチなもの』と彼（寺田）はもらしたものだ。寺田といえば、われわれの仲間の秀才で、中学三年のころ、ある新聞の懸賞小説に応募して矢田津世子につづく第二位に当選したことがあるほどだが、このセリフにはわたしたちも少々ドキッとした。

元来、若いころは他人のちょっとしたセリフに妙に感激するものだが、あのときの感銘はいまだに忘れられない。話の前後は忘れてしまったが、こいつたいした野郎だと内心うなったのが、いまでも一尾をひいているせいか、後年私の妻となった彼の妹に、『私はいまだ頭が上がらない。』」（「交遊抄」）

最後のフレーズについては、後ほど一雄夫妻の純愛物語を語る機会もあろうが、「人生は所詮ひとりポッチなもの」に心動かされた少年は無残な試練をのりこえて、やがて明るく、たくましく成長してゆくのである。それは父の学んだ明治大学の法科に入った、昭和七年を境にしてである。

■ 出世主義を清算した男

純情多感な少年の煩悶をオーバーに語りすぎたようだが、負けず嫌いで沈んだ顔はしなかったにしても、内心に鬱するものがあったのは、たしかだった。

昭和七年、明治大学に入学、官立の高校から締め出されたことは「官僚にっぽん」では、まず立身出世を断念せねばなるまい。白雲なびく駿河台の五年間は、「出世主義を清算した男」として、今日まで一貫して、人生にはげしく立ち向うヴァイタリティを与えた。

法科は独法であるが、映画研究会に入ったことは見逃せない。一雄は中学時代から休みというと、よく映画を見に行った。いつも同行は、「デブさん」こと杉山一男（現・有隣堂レストラン部主任）だった。少年時代から近くに住み、飛鳥田の家の人間のように育った。

一雄の母さとは、「デブさん、また映画かい」と嘆いたものだが、映研に入るとともに、映画関係の雑誌や本に読みふけった。だが、映研への入会は趣味以上の重要な意義がある。当時、この種の研究会は、左翼的・進歩的思想の持主の牙城だった。共産主義運動は地下に潜り、いわば、新しい思想に開眼した学生たちの左翼活動の拠点だった。

明大映研をリードしていた榎本駒次郎は、「筧清」のペンネームで映画評論を書くとともに、日本プロレタリア作家同盟に所属していた。一雄は榎本らの指導によって、映研の機関紙『シネ・テアトル』に、山中貞雄の股旅物映画の批判などを発表しているが、左翼運動への共鳴は、その傾斜の度に比例して、明るくのびのびと人間が変って行ったのである。東中野に下宿していて、いわゆる文学青年との交際や、マルクス主義の読書会に精力的に顔を出す。

こんな学生時代には、省線（今日の国電）のプラットフォームで、ハダカのまま酒を飲んだり、横浜に帰れば、繁華街・伊勢佐木町を濶歩する。よたって（？）いる一雄を見つけて、友人から「アッちゃん」と声がかかることも多かった。「出世主義」のツキ物がコロリと落ちて、裸かのままの人間が輝き出した、とでもいおうか。

もともと飛鳥田の家が、両親の人柄からか自然とたまり場のように、友人が集ってきたものだ。両親は暖かく迎えた。少々「お坊っちゃん的」な少年は、こんな環境があって、誰からも好かれる人気者であった。誰にも笑顔を見せるが、また一面では、内省的な陰影の豊かな人間であった。

それは、無類の読書家であることでもわかる。代議士になってから、国会への行き帰りの国電内で、一心不乱に勉強する真面目さが買われたが、その読書範囲は広い、専門の法律書ばかりでなく、文学書、社会科学書と、今日の人間的な深さと魅力の源泉を形ち作った。

父の喜一の書棚に無政府主義的な書物があったことから、新思想への開眼になったことを思えば、自由主義的な信条に生きた父の感化は、計り知れない。父の蔵書が知識の宝庫だった。喜一といえば、息子の反逆時代に、母の心配をよそにいつも暖い眼で息子に接していた。家へ持ちこまれた『赤旗』をこっそり焼き払ったりした。真夜中に家の廻りをうろつく特高が、「要注意人物」としてマークしながら手が出せなかったのは、弁護士だった父の人柄によるところがあった。一雄は「幸福な息子」といえよう。

明治大学法学部を十二年に卒業する。大学院に進み、司法試験にそなえる。この時代でも、寺田透や加藤衛たちとハマの街を歩き、文学を語り、人生を論じては痛飲した。暗い谷間の時代である。寺田は東大仏文を出てぶらぶらしていたが、やがて国策パルプに職を得たのもつかの間、応召して満洲へ出征した。一雄は司法試験に合格して、父の事務所を手伝うようになる。試験の成績は優秀だったが、多分に左翼的内容で賞を逸した。

弁護士を開業したのは十六年であるが、なりたてのほやほやの頃、岩手県松尾鉱山で落盤事故が起きた。松尾鉱山といえば、横浜

財界の大立物・中村房次郎の興した会社だが、また中村は民政党のボスでもあった。父の喜一はこの会社の顧問弁護士をしていたが、落盤事件という大問題だったため、当時弁護士だった片山哲が応援することになる。

一雄は父や片山に連れられて、ヤマへ行った。この弁護団は泊りこみで鉱害調査に駆けまわるとともに、夜はヤマの寮で社会問題や政治問題を論じ合った。想い出多い数夜であったが、一雄は片山の高潔な人格に心服して交際を深めた。戦後の社会党人党は、片山との関係からだった。

この若い弁護士は、どんな事件でもやった、という。「そうしなきゃ、横浜じゃ食えないですよ」と笑うが、社会運動や労働運動のギセイ者にも献身的に奉仕した。先輩のある弁護士は「若手では抜きんでていた。弁護一般、民事でも刑事でも力を持っていた。頭の良さと読書力は抜群で、判例の解釈も徹底していた」と語るが、「要注意人物」として憲兵隊に呼ばれたりしながらも、戦争で弁護事件は少くなり、一年間かかって『資本論』を読み通したり、幅広い読書生活がつづいた。

生きづらい環境であったが、足が悪く兵隊にとられない一雄は、「ほかの人より三、四年余計に勉強できた」時代であった。純情なる故に左翼思想への傾斜を深めつつ、戦後の華々しい活動を準備する蓄積の時代でもあった。

■ 日本一仲のよい夫婦

『主婦の友』四十一年六月号に、飛鳥田幸子の〝愛の記〟が掲載されている。談話を記者がまとめたものだが、表題は「もう一度生まれ変わっても」。

小児マヒでステッキにたよらねばならない夫と、学生時代から胸が悪くて寝たり起きたりの妻。この夫婦の純愛物語は、すでに『週刊現代』四十年六月十日号にも、中薗英助が精細に書き綴っている。こちらの題名は「媒酌人は戦場からの手紙」。今回は、二つの雑誌記事を参照しながら、進めさせてもらおう。

「私たちは、日本一仲のいい夫婦だと思っている。そして、私は日本一しあわせな妻だとも。私がりっぱだからではない。みんな彼のえらさのおかげなのだ。」――こう幸子はいうが、この結婚はちょっと変っていて、兄寺田透にいわせると「好意結婚」ということになる。いきさつはこうだ。

太平洋戦争がはじまった翌年。ある日、飛鳥田一雄は軍事郵便のスタンプのある一通の手紙をうけとる。満洲に出征していた親友寺田の手紙だ。読んで驚いてしまった。熱のこもった綿々たる筆使いで「妹の幸子のことが心配である。幸子をもらってやってくれ…」

一雄には、おさげ髪でニキビ面のかわいい女学生姿しか印象に残

昭和二十二年の飛鳥田一雄夫妻と喜子ちゃん

っていない。そのころ、昭和十七年の秋、幸子は津田英学塾（今の津田塾大学）を出て、ジャパン・ツーリスト・ビューロー（今の日本交通公社）の雑誌『旅』の編集部にいた。戸塚文子は五、六年先輩だった。幸子にも、兄から「おまえ、飛鳥田のところへ嫁に行く気はないか」と、簡単な文面がとどいていた。

ある日、一雄は幸子の勤め先をたずねたが、印刷所に出張校正に行っていて留守だった。幸子がもどってくると、受付のおばさんが「たったいま、足の悪い男の人が見えて、出かけているというと、お帰りになりましたよ」という。

幸子はすぐピンときて、社を飛び出してあとを追った。鍛冶橋の上でステッキをついた一雄に追いつく。そばの喫茶店「白十字」に入る。どちらもほとんど無言。一雄は手紙を見せ、幸子が読みおわるのを待って、ポツリと「よろしくお願いします」といった。幸子も何のためらいもなくこういった。「はい、よろしくお願いしますわ」——まことに、古典的な応対である。それから二人は夕日が斜めにさす歩道を、東京駅に向って歩いて行った。

中薗は、「そこには戦火がおしつぶし、焼きはらおうとしてもできなかった、人間関係の強い愛の紐帯があったことを見なければならない。これは戦中派であるわたしの感傷などではない。そうした愛の紐帯が二人の愛を育て、今日の飛鳥田一雄をつくり上げたという事実が、何よりも雄弁にその勝利を物語っているのではないか」と、多分に抒情的に語っている。

一雄と寺田とは、神中の仲の良いクラスメートであるが、二人の父も仕事の上で知り合っていた。一雄の父は弁護士であり、寺田の父は裁判所の書記をしていた。当時一雄の母は別に用意した縁談をもっていたが、父は「あの寺田の娘なら、まちがいない」と、それをしりぞけた。

一雄は勇躍して、神中時代の恩師長野正義のところへ仲人をたのみにいった。「うむ、よしひきうけたぞ。おまえと寺田をかけあわせたらおもしろいかも知れんな」——こういって破顔一笑したが、

結婚は昭和十八年一月九日であった。

新婚旅行は豪勢だった。その前に、一雄は弁護料で二百円の報酬を得ていた。当時の二百円といえば大金だが、気まえよく伊豆の十何日だかの新婚旅行で使い果してしまった。帰ってみれば、ポケットには、二円何十銭しか残っていなかった。

家賃二十二円也の新居から出発した二人の純愛物語は、くわしくは『主婦の友』を読んでもらいたいが、昭和十九年に、娘の喜子（きこ）を生むとまもなく、幸子は発病し、満足に主婦の役目を果たすことができなかった。そんなある時、一雄の手帳のページに「幸子、きょう熱高し」の一行をふと見かけて、こっそり涙するのであった。

この日本一仲のよい夫婦にも、一度だけ「さからい」があった。それは一雄が市長選に出たときだった。その時、一雄はこんな立候補の詩を作った。

厚い壁がさえぎっている
厚い壁が砕かれるだろう
厚い壁のこなごなは
やがてきれいに
除かれるだろう

「厚い壁」は古い因襲的なものを指しているのだろうが、保守系の前市長よりも、一雄にとっては、妻の幸子に「壁」を感じていたかもしれない。幸子にしてみれば、「代議士というよりもアカデミシャン、あるいは一学究ともいうべき」一雄に、直接施政の泥にまみれさせたくなかった。

一雄が一見、無頓着なライラクさをよそおっても、ほんとうは神経の細かいさびしがり屋だということを、よく知っていたからだ。一週間反対しつづけたが、一雄の決意が固いことを知って、この唯一の反対者もとうとう折れたのであった。

「何度生まれ変わってきても、あなたの妻としておそばにおいていただきますわ」と心から叫ばずにいられない、日本一しあわせな

妻――ファイト・マン飛鳥田一雄の素肌の魅力を雄弁に物語ってはいないだろうか。

■ 大衆のための政治家

終戦となった。――

この左翼的な野党精神の持主は、自由にものが言える時代を迎え、長い間の蓄積が一度にセキを切ったように奔流し出した。

まず、二十年十一月の日本社会党の結成に参加する。片山哲との関係はすでに見た通りだ。県連の組織作りに活躍する。党内では最左派の平和同志会系であるが、比較的柔軟な考え方を持っている。

そして、強靱なバイタリティは、〃組合弁護士〃として勇名をはせた　それロックアウトだ、それ警官との衝突だと、たえず現場を走り廻った。「赤旗のあるところ必ず飛鳥田の姿あり」といわれたほどで、二十八年ごろの日産自動車の大争議を指導したことは有名だ。

さらに、地域を中心とした運動も起す。二十一年から、磯子を中心に「山手文化会」を作り、俳人の古沢太穂らとともに、地域社会の民主化をめざして、古い因襲やしきたりと闘った。時代は少し後であるが、松川事件に対して、二十七年ごろ早くも神奈川県に対策協議会を作り、一雄が会長に、古沢が副会長となって活動し、破防法闘争にも精力的に動いた。

戦前の左翼運動の闘士は、水を得た魚のように、ハツラツたる言動でリードしたが、一雄の戦後を語る場合、二十年十二月十七日から横浜ではじまったBC級の戦犯裁判の弁護を忘れることはできない。

第一号の被告の弁護は渡辺治湟が担当したが、その後約二年間、父の喜一を助けてこの弁護に専念した。この裁判には、日本人弁護士をつけてほしいという決議が認められたが、アメリカ人の弁護士とともに困難な弁護に当った。最初から「事務屋」、「哲学者」とお互いに争うこともあったようだ。観念的な大陸法を学んだ一雄

は、訴訟の技術と英米法の勉強のために徹夜がつづき、文字通り心血を注いだ。一日百五十円也の日当でもあった。

一雄は、「アメリカの法廷へいっても、結構弁護士がつとまりますよ」と笑うが、とくにこの裁判の弁護技術が、後年の国会の討論に役立ったともいえる。

さきに引用した『朝日ジャーナル』三十七年三月四日号の「素顔」は、Yというイニシアル記事であるが、執筆者は神中時代の同級生で、『朝日ジャーナル』の編集長をやり、現在朝日新聞東京本社政治部長の岡田任雄であろうか。

「ぼくの質問、理屈っぽいといわれるんだがなあ、切込み方がいいとすりゃ、弁護士の技術が身についたせいかな。それもアメリカ流のね……」という一雄の言葉をうけて、Y氏はこう書いている。

「戦前の裁判は、裁判官中心で弁護士はとかく端役。アメリカ流の訴訟技術は弁護士が主役で、資料をみっちり集めたり、証人の性格が強情か弱気かなどを調べて、あの手この手の心理作戦で攻めつけたり――その手口を横浜の戦争裁判のときに習得したのだそうだ。アメリカもとんだ闘士に手口を教えてしまったものである。」

たしかに、指摘の通りであるが、はじめは政治の世界にみずから泥まみれになって入ろうという気持はなかった。「高踏的」だったのであろう。だが、戦後のきびしい時代に弁護士の仕事を通して、いつも政治の力が強くかかわり合っていることを痛感していた。そして思わぬ機会がやってきた。

それは、弁護士の傍ら横浜市会議員であった父の喜一が、二十四年五月に高松高検検事長に転出したことによる。その補欠選挙が行なわれた時、父のアナ埋めというか、身替りにかつがれたのである。所属政党はちがっていたが……。

この時、一雄は三十四才の若さで市会議員に当選したが、父の喜一の名を書いた無効投票が数百票もあった。父の名があまりにも知られていたためである。こんなこともあった。街頭演説で熱弁をふるっていると、三人ほど御老人が熱心に聞いている。うれしくなっ

て益々熱を入れる。ところが演説が終ったら、例の御老人がとことこやって来て、「おとっつあんの声によく似ているなあ」と、感にたえたような顔をしていったという。「横浜にいる間は、おやじの手前、えばれないですよ」と微苦笑する。

二十六年には神奈川県会議員、二十八年には衆議院議員と、トントン調子に当選するが、これもまた、他動的な理由も多分にあった。二十七年十月の総選挙には級友の川合武も自由党から立候補して、二人とも落選しているが、前年十月の社会党第八回臨時大会で左右が分裂したことも大きく影響している。神奈川県は右派が全盛で、左派には立つべき人がいなかったためでもあったが、大衆に役立つ場ならどこへでも出かけていった実績は無視することはできない。

議員一年生として、「議会に出ても当分ジッとしているつもりです。県会など見ていても出てきてすぐしゃべりまくる先生は一言居士になってしまって大成しませんネ。ボクはあらゆる意味で忠実な党員になりたいと思っています。」また、「党務より政務を担当したい。他党とのかけ引きなんてとてもボクにはできません。」（毎日新聞、二十八年五月一日）といっているように、手練手管の政治家ではない。大衆のための政治家である。

順風満帆の政界入りであった。大衆運動、労働運動で鍛え上げられた筋金入りの理論家、実践家として、たくましく成長するのである。戦後のこの時期、年令にして三十才から三十八才までの、油ののり切った壮年期であった。

■ 国会質問は当代一流だ

昭和三十五年五月五日、ソ連のフルシチョフ首相は、「去る四月九日の米機の領空侵犯とメーデー当日、ソ連領空に侵入した米機撃墜の事実」を爆弾声明し、俄然、アメリカのU2機によるスパイ事件が全世界の注目をあびた。旬日後に開かれた米英仏ソによる頂上会談はついに流産し、冷戦状態は悪化をたどった。

眼を国内に転じると、昭和三十五年、とくに上半期は〝安保〟に明け〝安保〟に暮れた。国会周辺はデモ隊に取囲まれ、与野党の間には、激しい舌戦が展開された。

とくに社会党の飛鳥田一雄、横路節雄、石橋政嗣は、「安保トリオ」といわれ、政府側を恐れさせてもいた。四月十四日の新聞は、「条約論争ではラチがあかぬ、今後はバクロで戦う」と社会党側の攻撃態勢を伝えているが、まさに決戦段階を迎えていたのである。

社会党内でとくに世界の戦術・戦略について造詣が深かった飛鳥田一雄の檜舞台ともいえた。すでに問題の〝黒いジェット機〟が日本の厚木基地（一雄の本籍地でもある）に三機駐留しており、同機の不時着事件をバクロしているが、フルシチョフ発言とタイミングを合わせ、五月九日の安保特別委員会では、岸首相、藤山外相らを相手に四つに渡り合った。

①昨年の藤沢飛行場へのU2機不時着問題、②在日U2機の行動、③その性格などを中心に「U2機の存在はアメリカの対日不信行為のあらわれである。このような存在を許す行政協定に欠陥がある」と、政府側を激しく攻撃しているが、これに対する政府側の見解が混乱し、委員会は緊張し、大きな波紋を投じたのである。

この十日後には、衆議院における強行採決が行なわれたわけだが、一雄は、よく資料を調べ、自信をもって追及の手をゆるめなかった。その一問一答をくわしく伝えるスペースがないのは残念だが、いわゆる〝安保国会〟における勇名は、まだわれわれの記憶に新たなところだ。「豊富な資料と歯ぎれのいい論理を使って、政府側をグイグイ追い詰めていくこの人の国会質問は、お世辞ぬきで当代一流だ」との声も聞かれた。

さて、〝安保論議〟の千両役者は、二十八年四月の総選挙に初当選してから、四期十年に亘る代議士生活中に、党の政務の中枢にいて、婦人学生対策部長、中執委員、法規対策副委員長、国民運動委員長として活躍したことも見逃がせない。

とくに、国民運動委員長に当選した直後の『朝日新聞』（三十七

年二月二日）は、「国民運動委員長というポストは、いわば社会党の指導する大衆運動の総元締である。従来このポストは長老級（前任者は細迫兼光氏）が占めてきたポストだが、こんどは新進気鋭の飛鳥田氏によって清新の気を吹き込もうというわけだ」と期待を寄せ、さらに「いわば江田氏の持つ理論面と佐々木氏の行動面を折衷して、均整のとれたものにせよということのようだ」と、その政治的立場に説明を加えている。

これは、選挙運動に見られる「文化性」とともに、教条的なイデオロギーに固執しない柔軟な理論家であることを示している。若年のころからの幅広い読書と、無類の勉強家であった賜物であるが、誰からも好かれる暖かい人柄による点も大きいと思われる。

三十五年十一月の総選挙の時である。神奈川第一区は、飛鳥田・藤山（愛一郎）という安保論争の宿敵が激しく競い合い、結局、藤山を約三万五千票引きはなし、十四万千三百五十四票と全国の最高得票で、飛鳥田一雄に軍配が上った。藤山は「負けたよ」とつぶや

いたが、票数のことではなく、ポスターの意匠のことだったという。

名前以外は何も入れない浮世絵風の木版刷り――制作者は、磯子小学校時代からの腕白仲間で、商業デザイナーの高橋錦吉だった。高橋ばかりではない。写真家の田村茂、演劇家の加藤衛、詩人の山田今次ら、友人たちが選挙運動の裏方として協力した。神中の同窓生の組織の「友飛会」がバックアップする。そして正面には出ないが、義兄に当る寺田透が相談役である。「良い友人に支えられたことが大きかった」と、虚心に感謝している。

横浜市長になってからすでに三年たつが、「代議士生活」に未練はない。ただ、国会のすばらしい調査網を利用できないことが残念だ、という。立法考査室や各委員会に付属した調査室の専門家が即座に資料を整えてくれ、「あんな良いところはない」そうだ。

資料を蒐集し、探偵小説家のような推理を働かせて、あのU2機をさぐり出したのであるが、十年の代議士生活は、極端にいうと、「新聞社の資料室の仕事みたい」だった。それにしても気鋭の理論家・実践家として、党内における役割は大きい。

『現代の眼』四十一年四月号では、江田三郎と「社会党政権の前提」を話し合っている。七〇年政権説をまえに、「日本における社会主義への道」を唱え、平和的な拠点闘争を基盤に、社会主義日本のヴィジョンを大胆に打ち出している。そして、「戦略論よりも戦術論の重視」「戦術としての民主主義の徹底」「毅然たる態度での統一論議」を望んでいる。

いわば、イデオロギー性をしっかり身につけ民主主義の定着をめざす大衆路線であるが、「大衆の役立つところなら、どこでもよい」という意欲には、世の「代議士病患者」のみにくさはない。爽やかな人間である。

■ 庶民的で木版刷りの味

NETテレビの「ふたりで話そう。幹事長・書記長」で、去る五月九日は田中角栄が病欠とあって、成田知巳がゲストの今東光に対

して孤軍奮闘していた。社会党には統治能力がないと東光和尚がにたりとすると、成田は、「いま横浜の市長をしている飛鳥田一雄君は、日本一の市長ですよ」と、眼をくりくりさせて答える一幕があった。

同じ陣営の評価であるが、一とか二とかは別にして、ゴマンといる市長さんのうちでは、十指に入ることは間違いない。すでに三年の実績が証明している。

昭和三十八年四月、前市長の半井清を破って市長に当選した。その時、鈴木茂三郎は「市長になってはいかん。本部で頑張ってくれ、書記長の椅子を用意するから……」といったそうだが、一雄には政治的野望が余りなかった。郷土の人たちの輿望をになってもいた。

ともかく、横浜はたえずほかから人間を借りてこなければならない宿命がある。朝日新聞社の『新・人国記4』はこういう。「横浜市長でもそうである。明治二十二年初代の市長が就任してから十八代の今日まで、文字通り横浜生れの〃市民市長〃といわれるのは、十六代目の故平沼亮三と現市長の飛鳥田一雄だけである。」

とくに最近、東京近郊の衛星都市では、人口の流入がはなはだしく、新開地の道路・水道・下水・教育の設備はお粗末なもの。失礼な言い方だが、「西部の街」のような様相を呈している。愛すべき横浜を建て直し、発展させて行くためにも、純粋の〃ハマッ子〃一雄に対する期待が大きかった。

〃革新市長〃といっても、地方自治体の運営はむずかしい。あれもないこれも足りない、といった実情だ。「三割自治」という言葉があるが、公共料金の値上げも頭が痛い。四十一年の春横浜市電の値上げが実施された時、貧窮者には無料パスを出すクリーンヒットをはなったが、「自治体の長」という仕事は、しんどい。飛鳥田一雄編著『自治体改革の理論的展望』（日本評論社）で、こういう。

「……そこには、中央・地方を通ずる強固にして抜きがたい官僚制、地域の有力者によってしめられている地域政治の底辺、ますま

す深刻化する都市問題などが山積みされていた。そして、なによりも生活の生々しい現実のなかから市政への激しい期待と数々の不満が滞積していた……。」

たとえば、市長選挙にあたって横浜市民への提案だった「一万人の市民集会」も、すでに三年ごしで市議会によって否決されている。自民党優勢の議会構成である。

前掲書は、今井清一、松下圭一、大島太郎ら学者との共同研究だが、「市民集会」の構想は、形骸化した間接民主主義のしくみを乗りこえる「民衆の声と力に支えられた政治」――直接民主主義の実現化にある。

無差別抽出によって一万人の市民を集め、総会、分科会にわけて直接に市民の声を聞こう、というわけだが、保守系の議員から「飛鳥田の宣伝になる」「議会制民主主義の否定になる」といった反対が強い。力強く上からの啓蒙を叫ぶのは、「政治的民主主義の態勢が強くきずかれることをぬきにして、革新への道が成り立たないことは、たしかなのだ。」（前掲書）という一雄の信念があるからだろう。

いずれにしても、柔軟に、時には良い意味の妥協性をもって、苦しい地方自治に取り組んできた一雄だが、政治家・市長としての評価はどうか？――「高度の理想、ハイカラの構想は大きすぎる。ついていける人が何人いるだろうか？」「弱気になって参ったとはいわないが、実際は苦しいのではないか。だが、政治家の手腕は立派だ」「人物としては誠実な男で信頼できる。将来を期待できる」等等、さまざまである。

マス・コミの評判も挙げておこう。「尊大なところがなく、だれかれなく気楽に話し合う庶民性がこの人の身上。」『東京新聞』三十九年三月二十八日）、「ひょっとするとデリカシーが『政治家』の邪魔をすることがあるかもしれない。タフでいて控えめ、自然児のようで都会人。野暮にもならず、キザにも堕さないですんだ木版刷りの味である」（『朝日ジャーナル』三十七年三月四日号）等

等、「敵」のいないのが人徳である。

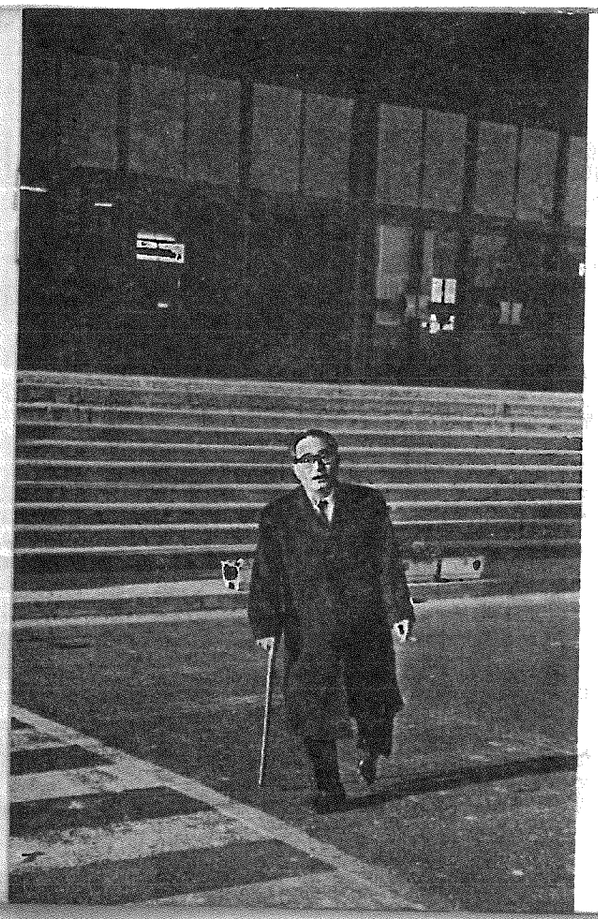
市長になっても公舎に入らず、せまい私宅で頑張っている弁も、一理屈ある。「大きな家に入ってるとね、娘が嫁にいったときに困るんだ。広い家に暮らしていれば、どうしても、広い家なりの身のこなしになる。それじゃおムコさんに申しわけないからな」と、公舎を市民のために開放する。〃革新市長〃らしい庶民性だ。娘の喜子は四十一年三月、明治大学を卒業した。

また、「政治家は名を残してはいけない。センチメンタリズムかもしれないが、仕事で残すべきだ」ともいう。だから色紙の揮毫は一切しない。「あったらニセモノですよ」と笑う。なんともいえない愛らしい笑顔である。

最後にちょっと一言——根っからの政治家タイプであるが、よく「労働貴族」に見られる「善にも強いが悪にも強い」といったアクの強さには欠けているのではないか。昔見た映画『集金旅行』のラストのセリフではないが、「教養がじゃまをしている」ところもあるようだ。学究肌なのであろう。

——敬称略——

おわり



友人の語る 飛鳥田一雄

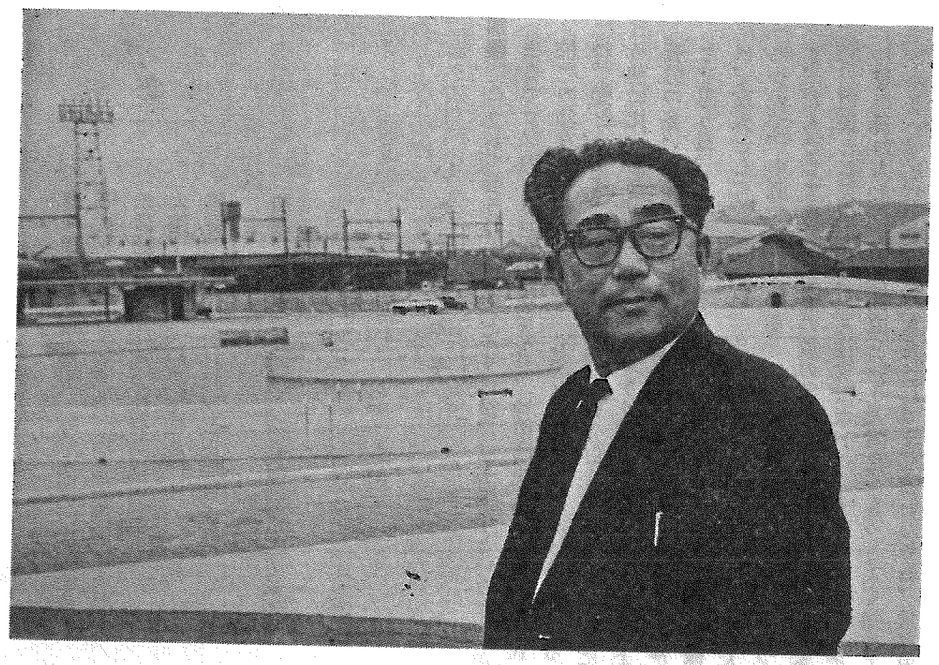
出席者

富井武寛（医学博士、慈恵会医科大学教授）
福原　正義（医学博士、福原内科医院々長）
松信総次郎（株式会社有隣堂会長）
大館　晃（大船光学社長）
城所　達夫（奥村組横浜出張所次長）

司会
加藤　衞（社団法人横浜演劇研究所長）

——いたずらっ子——

加藤　こうして会うのも、久しぶりだが、三十五年という年月が、まるでウソのようだね。顔なんか、神中時代（現、希望ケ丘高校）の幼なさ、そのままだ。もっとも髪は大分薄いのもいるがね。髪といえば、飛鳥田の髪は、ずい分白くなったね、市長になる前に比べると。この間、久しぶりで会って、びっくりしたよ。苦労の多い仕事なんだな、市長っていうのは。四年間、大変だったと思うね、友人としても、市民としても。そこで、この機会に、友人として、あるいは、市民として、飛鳥田一雄という人間について、率直にしゃべりあってみようと思うんだがね。つまり、友人としては、四年間の彼の努力をねぎらいたい気持があるし、市民としては、いろいろ注文したいこともあるし。それに、一般市民の人たちに、飛鳥田という人間を、もっとよく知ってもらいたい、という気持が、友人としては、強いんでね。飛鳥田の



髪といえば、飛鳥田の髪は、ずい分白くなったね。市長になる前に比べると…

四年間やってきた仕事を理解するには、やはり、彼の人間を、よく知る必要があるからな。ぼくら、昭和二年から七年までの神中時代の五年間が、彼との人間的なふれあいの最初の時期なんだが富井だろ、一番早いつきあいは……

富井　そうね、ぼくは古いつきあいだね。一年の頃からだから。一、二年頃は、将棋だったな、遊びといえば。三年頃からは、議論が中心だった。とにかく、朝から晩までいっしょだった時期が、かなり長く続いたね。ぼくはキリスト教の影響を受けていたし、彼は無神論的だったからね、いつも、そこで議論がはじまるわけだ。すると、ぼくは必ず負けるんだよ。彼は勉強してたからね、ぼくは勉強してないし。だけど負けると、くやしくてね、ぼくも勉強する。卒業するまで続いたな、そんなふうに。

大館　負けずぎらいっていえば、飛鳥田のほうが、富井より上だよ。運動でも勉強でもね。

富井　野球もやるし、水泳もやるし。

大館　いまでも好きだからな、野球や水泳。市長になってから、子供のために野球場をつくったり、プールをつくったり、やっぱり、子供の頃のよき思い出からの発想なんだろうな。

松信　何でもやってやろうってところがあったね。

福原　絵画部にもはいっていたろ。

加藤　なかなか絵をかかない絵画部員でね。何でもやってやろうってとこは、読書にもあったな。多読・乱読・雑読、というかな、とにかく、やたらに、それこそ、文字通り、片っぱしから読んでいたね。いまでも、それが続いているらしいな。こいつは、誰にも真似のできないところだよ。えらいもんだ。伊勢ブラなんかしていると、必ず、帰りには、本屋に寄って、勉強堂とか有隣堂とか、二三冊買いこんでいったな。

松信　家のほうへもって行けないような本ね、マルクシズムの本なんか、ぼくが、学校に届けたことがあったよ。

大館　四年頃だろ。

松信　三年だったね。ああいう本を読みはじめたのは。二年の頃まではずい分乱暴な奴だな、と思ってたけどね。

城所　乱暴っていうより、いたずら小僧だね。天衣無縫っていうのかな、いまでも、そういうところがあるね。

加藤　マンモス・プールの開場式に、いきなりプールにとびこんだりしてね、子供たちといっしょに泳いでる顔なんか、十四、五の少年時代と全然変らないんだな。たとえば、この間、総理大臣の佐藤氏が、小学校の視察に出かけた時の顔ね、テレビで見たんだが、全然、コワばっていてね、あれじゃ、子供と親しくなろうったって、子供のほうが近づいてこないよ。「政治家」にはよくあるやつだ。つくり笑いしながら、子供の頭をなでたり、通行人と握手したりね、大分無理してるんだな。ところが、飛鳥田にはそれがないんだな。邪気がないっていうのかな。無理がない。

大館　やっぱり、家庭がよかったんだよ。親父さん（元市会議長飛鳥田喜一氏）紳士だからな。ノビノビとした家庭っていうんだね。子供が好き勝手に暮せる家庭、こいつはうらやましいな。飛鳥田ほど、両親を敬愛している奴も珍しいし、また、その飛鳥田を、腹から信頼している親父っていうのも、貴重な存在だね、いまどき。

城所　親父さんが保守党（民政党）で、せがれが社会党っていうのも珍しいし、しかも、お互いに、それぞれの立場を認めあってるなんていうのも、面白いね。だいたい親父なんていうものは、自分のワクのなかでせがれのことを考えたいもんだし、せがれは、何とか親父のワクをぬけ出そうとする、っていうのが常識でね。飛鳥田の場合は、親父のワクをぬけ出すというより、はじめっから、自分の軌道の上を走っているって感じだな。親父がそれを認めてるっていうのも、よっぽど信頼してなきゃできないことだよね。

富井　それはね、親父さんがおふくろさんに、すっかり惚れこんでるってことね。いい家庭っていうのは、そういうものが基盤になるんだものね。人間への信頼感は、そこから生れるんだからね。アッちゃんが、ある意味で、ダダッ子でいたずら小僧なのも、人間が信じていられるからだよ。だから、自由奔放に、思いのままに暴れまわっても、決して、「人間」のワクからはずれないんだな。

G 3009

松信　だから、アッちゃんくらい、つきあいの範囲の広い人間はないね。どんな連中とでも、人間としてのつきあいができるんだ。

加藤　正直いうとね、ぼくはまだ深いつきあいのない頃だったがね、大胆率直なふるまいや、誰とでもつきあうのをみてね、相当無理してるなって思ってたもんだ。足が悪いことを意識していて、それを陽性な、積極的な行動で、カバーしてるんじゃないかってね。ところが、違うんだな。ぼくは、ちょっとでも、そんなふうに誤解していたことを、いま思い出しても、自分で恥しくなるんだ。

城所　ぼくは町なかに育った人間だから、磯子のようなところに育った人は、きらいだったね。下町と山ノ手の人種の違いのようなもんを、感じていたんだね。だから、アッちゃんとつきあいはじめたのは、神中時代の後期だったけど、つきあってみると、ぼくらと同質の下町っ子的いたずらっ子っていうのかな、幼ななじみ以上のものを感じたね。

――男が好きになれる男――

富井　つまりね、男同志が好きになれるような男じゃないかな。

加藤　まさにそれだな。戦争末期、ぼくが兵隊にとられるまでの一年間ぐらいだったがね、ほとんど毎日のように、相生町のあいつの法律事務所に、足を運んだもんだよ。家にジッとしていられなかったんだね。いやな、泥沼にひきずりこまれて行くような気持の毎日だったからね。別に話があるわけでもない。でも、あいつと向いあって、バカ話してると、気持が落着くんだ。そういう男だね。顔を見ているだけで、こっちの気持が安らぐんだ。もう一

つ、エピソードをいうとね、兵隊にとられてから、はじめて、自宅に立ち寄るチャンスがあってね、三時間ほど、家にいたかな。家につくと、すぐに、電話で飛鳥田を呼び出してね、いっしょにメシを食ったんだ。後で、カミさんにうらまれてね。

福原　何だ、おノロケか。

加藤　いやいや、そういうわけじゃないんだが、ふつうなら、半年ぶりだからね、シンミリ、カミさんと話しあうところなんだが、ごく自然に、飛鳥田を呼び出しているんだね。そういう魅力があるんだよ、あいつには。

福原　ということは、一見、豪放にみえるけど、実は、こまかい神経の持主だってことだね。こまかいところに、よく気がつくからね。

大館　そう、市政にもそれはあらわれてるな。「子供を大切にする」というのも、単なるスローガンとしてじゃなく、子供への神経の通いあいからきているんだよ。あいつ、選挙で、小学校の講堂を演説会場に使うだろ、そんな時、講堂の入口で、靴を脱いでね。そいつをぶらさげてはいって行くんだ。他の人が、そんなことをやると、ちょっとキザにみえかねないがね、やつには、それが感じられないんだ。ごく自然なんだね。

加藤　こういうこともあったな。ぼくは、終戦を、山元町の山の上、平楽小学校を兵舎にしていた、海軍の船舶警戒部っていうところで迎えたんだがね、だから、横浜の空襲も、そこで経験したんだ。兵舎から、自分の家が燃えるのが見えてた。その翌日、特別外出を許されて、焼跡へ行ったんだ。ぼくの書斎のあったところで、まだ、本がブスブス燃えてるんだ。そこに、やつが、つくねんと立っているんだよ。感動なんて、口でいえるもんじゃないな。じーんとしちゃったな。あいつの事務所だって、焼けたのに、友人の留守宅の焼け跡を、わざわざ見舞ってくれたんだ。しかも、ぼくが、特別外出で戻ってくるなんてことは、全然考えてもいない。ただ、友人の家族や家が、どうなってるか、見舞わないではいられなかったんだな。ぼくら、ただ、黙って、眼を見あわせたきりだった。何をしゃべったか、覚えていない。おそらく、何もしゃべらなかったんだろうな。それで、充分だった。飛鳥田って、そういうやつだよ。ぼくが友人だから、そうなのかもしれないが、多分、友人じゃなくても、あいつと人間的につきあったら、何もかも、まかせられるって思いをもつに違いないな、誰でも。そういう意味で、ほんものの政治家なんだよ。日本て国には、政治屋は、はいて捨てるほどいるけれど、本当の政治家は、ほとんどいないからな。大事にしたいね。

――学究的で実務的、実務的で学究的――

松信　彼は、最初、何になろうと思ったのかな。

富井　彼の人生で、神中四年の時が、一つの転期だったと思うね。水戸高校を受けたでしょ。いっしょに受けた川合武（消防庁次長）や岡田任雄（朝日新聞政治部長）ははいったのに、彼は落ちた。落ちるはずないんだ。それが落ちた。足のせいなんだね。当時、軍事教練が正課になって、だんだん強化されはじめた時期だったからね。足が悪いことは、越えられない壁だったんだね。

加藤　官学、そして、それが日本の悪評高い官僚政治につながるわけだが、そういうものへの抵抗が、その頃、彼の胸のうちに、はっきりしてきたんだろうね。

福原　力への抵抗精神だな。

大館　親父さんが弁護士だったということもあるが、それより、官吏とかサラリーマンよりも、自分の能力で、独立独歩、自由に働ける領域を選んだのも、わかるな。

城所　だいたい、子供ってものは、親父の職業には批判的でね、なりたがらないもんだがね。

加藤　そうなんだ、ぼくなんか、医者になるように強要されたんだが、親父みているといやでね、とうとうならなかったくらいだからね。

松信　アッちゃんの場合、それだけ、親父さんを信頼していたってことにもなるね。

大館　そういえるな。結局、政治家になったのも、親父さんが立派だったからだよね。もっとも、この頃は、世襲的な「政治屋」がふえて、親子二代にわたって、汚職や選挙違反を平気でやっているのがいるがね。親父の否定的な面を批判するどころか、そういうところまで「世襲」している政治屋が多いんだ。飛鳥田の場合は、親父さんが、清廉な人だったから、政治家になることにも、抵抗を感じなかったんだろうな。

加藤　知識人としての飛鳥田には、やはり、政治家たろうとすることに、ある種の抵抗はあったかもしれないがね。つまり、実務家にしては、学者的なところがありすぎるからな。しかし、学者であるには、実務家としての血が多すぎたってことでもあるな。だから、弁護士って職業が、びったりだったわけだよ。単なる実務家でもいけないし、といって、純粋の学者でも、弁護士はつとまらないからね。もともと、学問そのものが、理論と実際とつねにかかりあったところに成り立つものなんだが、どんな領域でもね。ところが、日本じゃ、学者は純粋であろうとして、実際から全くはなれてしまうし、実際家は、学問と無縁だってなことになりかねないんでね。政治だってそうだよ、知的でなくちゃいけないのに、実際の政治屋には、全く知的なものが欠けているからね。無知で、恥知らずでなくちゃ、政治屋になれない状態が、根強いからな。

――近代的な政治家――

福原　そういう意味で、アッちゃんは、近代的な政治家といえるんじゃないかね。知的な政治家っていうかな、市政にも、それは出ているね。

富井　公害問題でも、住民対策にしても、たとえば、交通問題、上下水道の問題でもね、学問的な研究をとことんまでやって、その上で、実際的処理をしているでしょ。その場その場の穴を、ただうめる、というんじゃなくて、その穴の根拠を追求するっていう態度ね。だから、全然、ジミな政治に終るかもしれないけど、そこからはじめないことには、本当の政治はできないわけだよね。

松信　たとえば、市長への手紙を出す運動とか、住民集会とかね、市民といっしょに市政を考えよう、という態度ね、これなんか、一見何でもないことのようだけど、やっぱり、飛鳥田じゃなくちゃできないことだ。古い政治屋にいわせると、人気とりだとか、選挙対策だなんてことになるらしいけど、佐藤内閣の「内遊」とは、本質的に意味が違うからね。その住民集会で、市民からの要求がでても、現在の段階では、できないものはできない、いますぐは無理だが、いつ頃までにはできる、といったようなことを、はっきりいうからね。もし、人気とりなら、何とかしましょう、なんて、ニコニコ応対するだけでいいんだからね。できないことをできないとはっきりいうには、政治家としては勇気がいることだし、その理由を納得のいくように誠実に説明すれば、市民もわかってくれるからな。市長への手紙だって、一つ一つ読んで、問題を整理し、一つ一つに答えているものね。市民生活の安定をほんとうに考えていなくちゃ、そうはできないよ。それが、「知的」ってことだよな。

城所　高いところから降りていっての「下情視察」とは、わけが違う。ほんとうの「大衆的」な政治家ともいえるね。

大館　小学校の講堂やプールを、猛烈なスピードでつくっているだろ。「子供を大切にする」っていうのが、単なるスローガンではないってことだよ。

福原　それにしても、アッちゃんは、大変な時に、市長になったもんだね。交通局問題にしても、破産寸前にあったんだし、道路も下水も、ほとんど整備されていなかったし、まあ、都市計画なんてものが全く手のつけられていない時に、市長を引き受けることになったんだからね。

城所　そうなんだ。それに、毎年、十万もの人口がふえているしね。人口増加率は、日本で一番じゃないのかな。そういう状態のなかでの都市計画ってことになると、よほど、はっきりしたイメージをもって、しかも、大胆にやらないことには、アブハチとらずになっちまうからね。そこで、いつも思うんだけどね、前の市長はそれなりの構想をもって、市政をおしすすめていたんだろうけど、飛鳥田が引き受けてみると、大分、自分のイメージと違うところがあるわけだ。だから、根本的にやり直さなくちゃならない部分が、ほとんどなんだ。ところが、アッちゃんは、絶対に、前の市長の仕事に対して、批判的なことはいわないんだな。黙々と、その後片づけをし、その上で、自分の構想に従って、仕事をすすめているんだね。これはちょっとできないことだよね。普通なら、前の市長がこんなことをしていたから、どうだとか、自分の仕事が批判を受けた場合に、前の市長の仕事をいいわけにつかうわけだけどね。そういうことはいっさいしない。立派だよな。

――仕事への自信――

松信　つまり、自分のやることに、自信があるからさ。自分の代になってからの仕事は、たとえ、前からのひっかかりであろうと、自分の責任において処理するという自信ね。決して、グチはいわないってことね。負けずぎらいってこともあるけど、やっぱり、自信をもっているからさ。また、それだけの力ももっているからな。

大館　交通局の問題だって、うっかり手をつけたら「政治屋」なら、マイナスになるところだから、ホッかむりしたいところだよ。市長就任早々に、水道料金の値上げ、また、去年は、市電、バス料金の値上げ、といったように、革新市長としては、つらいところだよ。それを、やってのけた、というのは、市政全体を考えての上のことでね。革新市長の面子とか、そんなことにこだわらないところは、ちょっと、誰にも真似のできないところだな。

彼を支持している組合からつきあげられても、やらなくちゃならないことはやるってことだね。また、そういう反対者を説得するだけの根拠をもっているってことだね。

福原　ふつうの政治屋だと、カンに頼っているだけだからね。こういうことをしたら、票になる。こういうことをやったら、票をフイにする、といったところで、何でもきめて行くようなところがあるからね。最近やかましくいわれている荒船とかいう大臣のやったことなんか、まさに、その典型的なもんだけどね。飛鳥田には、論理的な根拠があるからね。

富井　学者なんかの意見を卒直にきいているようだね。都市計画にしても、公害問題にしても、学問的な研究の成果を、どんどんとりいれてるようだね。

加藤　それが、さっきいった、「知的」な政治ってことだよ。最近、一部じゃ、こんなことをいってるものな。日本じゃ、普通選挙が早すぎたんじゃないか、ってね。一部の選挙民に直接つながることしか、ふつう、政治屋は考えないものな。票にならないことはやらない。次期選挙では、荒船って人は当選確実だ、なんていわれているくらいだからね。

―― 文化政策に対する姿勢 ――

大館　だけど、どうなんだい、文化政策は。マモルなんか、そういう仕事をしているから、意見があるだろう。

加藤　うん、文化ね。ぼくは、公害問題とか、交通、下水といったような市民の実際生活に直接つながる問題が、「知的」に処理されること、つまり、「人間的」に処理されること、選挙における票といったような個人的な利害関係からじゃなくね。だから、「子供を大切にする」といった市政が、自然に生れてくるんだけど、そういう方向での市政、それ自身が、「文化」的だと思うんだけどね。ただ、いわゆる市民の「文化活動」という面から考えると、やはり、多少の注文はあるな。どんなに立派な施設がつくられても、市民の側で、それを有効に利用する能力がなければ、無意味だからね。地方の都市じゃ、そういうのがあるからね。二千人収容なんていうデッかいホールを造っちゃってね、そういうホールを、市民が日常的に使いこなしているかというと、そうはいかないんだな。その都市にとっては、他都市に対する自慢のタネにはなっても、市民生活とは、あまり関係がないってことなんだ。しかし、横浜では、現実的にいって、そういう施設への要望は強いんだ。また、それだけ、市民には文化活動の力はあるんだね。いまのところ、県の施設で、どうにか、まかなわれているけど、それも飽和状態でね。けどね、飛鳥田から、三割自治なんてきかされ、市の財政状態の話をきくとね、なるほど、目下のところじゃ、横浜じゃ、無理かな、とあきらめてもいるんだがね。

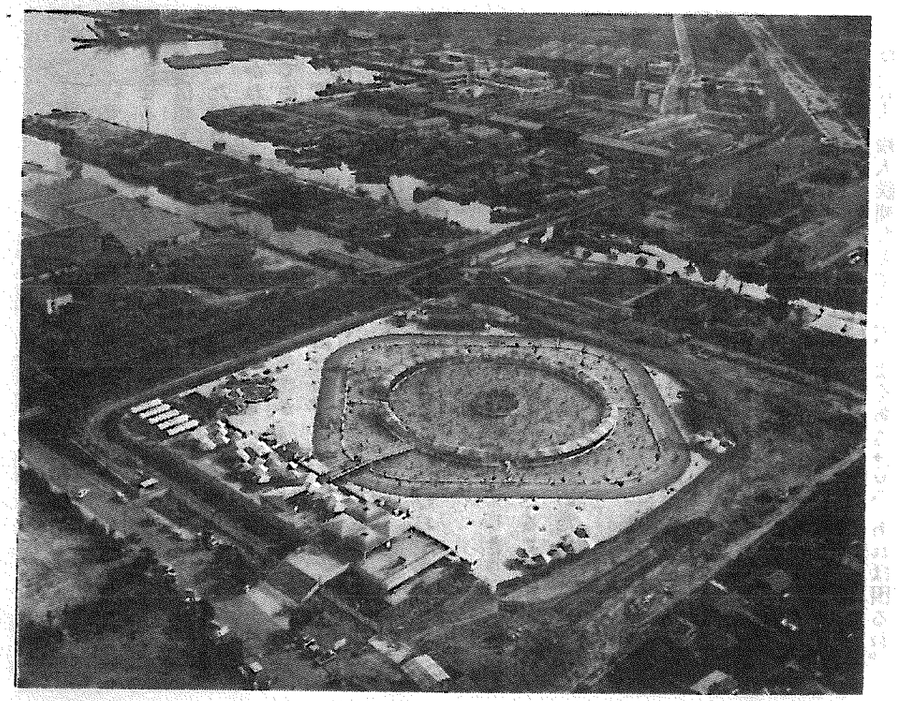
大館　そういう施設では、マンモスプールがよかったね。海をうばわれたこどものためにっていうんだが、実感だな。それに、これは註文だが、市民ギャラリーを発展さしてやはり市民の美術館がほしいね。これも実感だな。しかし、たしかに、人の眼につかない、マモルのいう文化生活の基盤に対しては、ジミだが、実にいい仕事をしているけど、やっぱり、市民としては、何か派手なものもほしい、そういう気持はあるね。

加藤　ただね、ぼくらの考えていることとは別に、彼は彼なりに、はっきりしたものはもってるんだな。例の「アマチュア小劇場」ね、あれなんか、その一つの例だけど、あれは、ぼくも賛成だったんだ。残念ながら、市会でツブされちゃったけどね。あれなんか、ぼくらのほうから、市長をつっついて、ああいう案をたてさせたように、市会あたりでは、受けとっているらしいがね、大変な誤解でね。あれは全く、飛鳥田の独創的な考えなんだ。後で、その話をきかされて、ぼくはうれしかったんだが、つまり、市民の文化活動は、ある特定の時期における活動も重要には違いないが、何といっても日常的な活動が大切なんでね。殊に演劇活動はね。日常的な活動によってはじめて、市民生活との結びつきを緊

密にできるんでね。それには場所が必要だし、日常的な演劇活動には、せいぜい座席百五十ぐらいの小ホールが、適当なんだな。飛鳥田は、そういうわれわれの気持を察してね、ああいう案をたてたんだ。つまり、ぼくらの気持を、ちゃんとくみとるだけの理解力があったってことだよ。もっとも、ふだん、ぼくらとの無駄話なんかで、そういうことは、わかっていたんだろうがね。とにかく、ぼくらのほうで要求しないうちに、ちゃんと、そういう手を打ってくれるという神経ね、これは、ぼくらの問題ばかりじゃなく、市政一般にもいえることでね。もう一つ、この問題で大切なことは、金がなければないで、利用できるものは利用しよう、そういうやり方ね。たとえ、小ホールでも、独立の小屋をつくるとなったら、一億に近い金はかかるからね。それを、わずか、五百万の金で、私設のホールを公共的なものに利用するという考えね、こいつは、全国の都市が真似してもいい、独創的な考えだよ。全国のアマチュア劇団も、適当な小ホールがなくて、それが活動の障害になってるんだからね。さいわい、同じ考え方で、横浜駅の東口にできるホールを、アマチュア劇団に利用させてもらえるようにしてくれたんで、来年からは、ますます、横浜のアマチュア演劇はさかんになるね。同じように、野毛にできる競馬協会のビルの五階を、婦人コーナーとして利用できるように、話をすすめているがね、これなんかも、飛鳥田らしい発想だね。

大館　たしかに、そういう考え方は、独創的だな。各区に、そういった文化施設をつくるのが、彼の考えらしいが、それも、市民生活との直接的な結びつきをめざしているってことだよね。

加藤　それにしても、やはり、いつかは、横浜の中心地に、座席千二、三百の県立音楽堂ぐらいの市民会館は、つくってもらいたいな。たとえば、現代美術館に附属のホールをつくり、そのホールを市民会館、あるいは、市立劇場としての意味ももたせる、そういう施設をね。



埋立の工場地帯から、海をとり戻した、マンモス・プール

――直接市民生活に結びついた政治――

城所　いずれにしても、市民の気持を、ぐっとつかんで、市政に反映させる、ということね、こいつは、さっきから話のでている、人間信頼と自分の仕事に対する確信ね、これがあるからだよ。

富井　ただカンでとらえることは、これまでの政治屋ならやっていたがね。アッちゃんの場合は、それを、学問的な裏づけにもとずいてやっているってことだよ、そこが、これまでの政治屋とは違う、近代的政治家といえる理由だね。

松信　交通局の赤字問題だって、思いきった処置をしているからね。飛鳥田でなきゃあできないことだよ。

福原　そういう意味で、全国の革新市政の一つのお手本にもなってるね。

松信　そうなんだ。たとえば、共産党なんかが、しきりに、革新的なことをいうだろ。ところが、共産党のやってることは、みんな党中心の考え方に基いてるんでね。結局、党のための革新政治なんだな。

城所　飛鳥田の場合は、社会党々員なんだが、一見、党にとっては不利なことでも、それが、市民のために必要なら、敢えてやってのけるってとこがあるものね。

大館　それは、別の見方をすれば、彼が横浜出身だってこともあるね。やっぱり、あいつは、ぼくら同様、横浜で生まれ、横浜で育ったってことね、ほんとに、横浜が好きだからな。市長ってのは芯底から、その土地を愛してるものでなけりゃぁ、なっちゃいけないな。輸入候補なんてのが、よくあるけど、あれは困るね。

加藤　じゃあ、ここらで一人一人、一つ註文なり、希望なり出してもらおうか。

松信　友人としてよりも、市民として、アッちゃんには、いつまでも、市長をやってもらいたいってことだね。

福原　近代的な政治のお手本をつくってもらいたいってことね。

富井　いまの姿勢をくずさずにね。ほんとの意味で、「知的」な政治をね。それが、市民の、大衆の政治なんだものね。

城所　ちょっと忙しすぎるから、今度また市長をやるようだったら、そこんとこを考えてもらいたいな。身体が参っちゃうよ。

大館　何でもかんでも、自分でやらなくちゃ気がすまないってところがあるからね。むろん、市長の責任上、何でも知ってなくちゃならないにしても、少しこまかく、動きまわりすぎるからな。

加藤　彼の気持としちゃぁ、学究生活へのあこがれのようなものがあると思うけど、やっぱり、その学究的な態度で、いつまでも、市政にのぞんでもらいたいな。富井がいったようにね。本当の意味での「市政」を遂行して、将来、その学究的な基盤の上で、市政学というか、まあ、日本における都市政治の学問的体系化、市長学といってもいいな、そういうものをうちたてるところまで、実際政治に努力してもらいたいな。もう一人、寺田透（評論家・東大教授）が加わわっていたら、もうちょっと違った話も出たかもしれないが、残念だったな。じゃ、これで……。

1963

1966

一つの生き方

昭和41年11月15日発行

発行所
横浜市中区尾上町2－20
友　飛　会

発行人
友飛会々長
松信総次郎

定価　20円

早いもので、飛鳥田君が市長に就任してから、もう三年半になります。その間の苦労は大変なものだったと思われます。わたしども友人としては、時には、気の毒に、と思うこともありました。しかし、横浜市民としてのわたしどもは、やはり、安心して市政のまかせられる人として、彼の市政への構想とその実行力には、大いに信頼もし、敬服もし、今後も大いに働いてもらいたいと思っております。

たまたま、友人連中が集って、そのことが話題になりました。その勝手なおしゃべりをここにまとめてみたわけですが、飛鳥田君の人間の一端を、いくらかでも、多くの人たちに、理解していただけたら、と思ったからです。

なお、図書新聞連載（四十一年四月三十日号―六月十八日号）の「ひとつの人格」、このわたしどものおしゃべり以上に的確な、客観的な描写を、筆者の安田金三郎さん、図書新聞編集部の御好意で、掲載させていただくことができました。その御好意に心からお礼を申上げたいと思います。

この小冊子が、読者のみなさんと、飛鳥田一雄という人間とのふれあいにいくらかでも、お役に立つなら大変うれしく思っております。

友　飛　会
会長　松　信　総　次　郎